

Title	松井先生を偲んで
Author(s)	関下, 稔
Citation	経済論叢 (1972), 110(5): 330-332
Issue Date	1972-11
URL	http://dx.doi.org/10.14989/133492
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第110卷 第5号

哀 辞

故松井 清教授遺影および原稿

産業コンサルト	堀 江 英 一	1
創業利得と利益留保	高 寺 貞 男	27
不生産的階級と生存競争の組織化	池 上 惇	41
GMにおける予想制度と基準価格制度の形成	小 野 秀 生	57
個人的消費と労働力再生産の社会的性格	成 瀬 龍 夫	78

記 事

松井教授逝く

追 悼 講 演 (吉信 肅・森下二次也・山岡亮一)

追 憶 談 (田畑茂二郎・杉本昭七・関下 稔・鈴木 明)

故松井 清教授略歴・著作目録

昭和47年11月

京 都 大 学 經 済 學 會

松井先生を偲んで

関 下 稔

松井先生がなくなられてから、1カ月近くが経過しようとしています、正直のところ、今でも、先生がなくなられたという実感がわいてきません。研究室の前を通るたびに、中からドアが開いて、「やあ、こんにちわ。元気でやってるかい。」と、いつもの特徴ある笑顔を私たちにむけられるのではないかという気がしてならないのです。

私たち、現在いる院生は、全て、あの69年の紛争以来、先生の御指導を受けてきた者ばかりでして、先生の思い出はあの時のことと結びつかざるをえません。それ以前の先生については直接には知りませんので、わかりませんが、私たちがお世話になるようになってからの先生を拝見していますと、なにか1年1年お年を召していかれたように思われます。この数年間、たとえ期間は短くとも、先生にとって、精神的にも肉体的にも、きわめて苦難に満ちた年月であったように思われてなりません。戦前の天皇制ファシズムのもとで研究者生活を開始され、二度にわたる従軍の中で戦争をすごされ、そしてまた、戦後の民主主義の時代にあっても、数多くの屈折をくぐりぬけられてきた、先生の試練済みの理論と経験をもってしても、この数年間の大学の内外をめぐる激動ぶりには、本当に苦悩されておられたように思われます。先生は研究者に多くみられる、自己抑制心の過度に強いタイプの人ではなく、どちらかといえば、開放的で、自分の思っていることは率直に表明される方でしたが、そのためにかえって、利巧な人々に足許をすくわれ、心を深く傷つけられてふさがれることが多かったと思います。そして、大学の民主化を性急に願うあまり、私たちが出す生硬な議論にも、じっと耳を傾けられ、つとめて平静にして、その内面での葛藤を表面にだされないように懸命に努力されていた姿が今でも思い浮びます。しかし、そうした忍耐力をもってしても、当時の大学を取巻く複雑多岐な事情の中では、大学の民主化をかちとるべき主体の力量不足や一時的な後退をみて、心ならずも何度か率直な不満をわれわれにもらされたことがありました。しかし、そのあとで、病床の先生をお見舞したとき、ふとんにきちんと正座されて、一時の感情にまかせて勝手なことをいってしまい、君たちにも迷惑をかけてしまった。自分は昔から動揺しやすい質で、いつまでたってもこれが直らないが、これからはもっと自己を厳しく鍛えたいと思うと言われました。その時の先生の率直で、真摯な、少しも悪びれな

い態度に、思わず身のひきしめるような感動を覚えました。確かに、先生は、世間的な狡智にたけた方ではなかったのも、その率直な心情の吐露が、時には、誤解や摩擦を生んだでしょうし、また、利巧な人々に巧みに足許をすくわれたり、利用されたりしたことも、一再ならずあったと思われます。しかし、こうした少年のような率直さや純真さを失わない先生の人柄に、私たちはまったく魅せられ、大きな敬愛の念を感じざるをえませんでした。

また、ゼミの指導においても、あくまでも本人の主体性、自主性を重んじられ、自由に伸び伸びと研究することを教えられた先生は、ゼミナールでも、ひとつの結論がでるまで、とことん議論するのではなく、議論の中から各自が自由に滋養分をとりだせばよいといった態度で、結論をおしつけるようなことはされませんでした。それがかえって、院生には不満で、もっと教えてほしいと願うと、研究は自分が苦しみながらつかむものだからなあと、てれくさそうな、困惑したような顔つきで頭をかかれています。このように先生は、研究者の主体性や自主性を尊重され、そのための自由な環境を作りあげることにはたえず腐心されましたが、それだけに、こうしたものを妨害し、干渉を加えるものにたいしては、深い憤りをもって抵抗されました。そして、研究者は自分の学問的成果に誇りをもち、安易な追従はするなとたえず強調されました。

この数年間の苦闘に打勝って、先生が以前の元氣な姿に戻られたのは、この数カ月前だったと思われます。還暦記念も済んだ6月の末に、院生がお宅にうかがった折は、まったく上機嫌で、そういう時のくせで、私たちの誰かれなしにつかまえて、一流の毒舌で私たちを困らせては喜んでおられました。これで先生も、この数年間の苦悩を乗り越られ、これからはきっとすばらしい余生がはじまるだろうと、私たちの全てがその時感じました。

また、なくなられる直前の8月末にお会いした折も、夏に行った東欧の話をアルバムを見せながら説明して下さいました。中国や朝鮮の社会主義をみて、一面ではすばらしいと思いつつも、他面では、正直いって、ちょっと窮屈すぎると、日頃密かに告白されていた先生にとって、東欧の社会主義建設の姿は、問題点も多いとはいえ、別の良さをもって、自分の心情に合うものが少なからずあったようです。マルクスは「自由の王国」を建設することこそ人類の理想の実現であるといったが、そこへ行きつく道は、それぞれの国のおかれている条件や時代、環境などの相違によって様々であるということが本当によくわかった。だから、日本が社会主義になるとときには、きっとどこにもない、すばらしいものになるだろうし、自分もその時まで生きていて、この眼で確かめたい。それよりも、なによりも、その日が一刻も早く来るように、少しでも役に立つ仕事をしていきたいと、それこそ少年のように眼を輝かせながら、まったく楽天的に将来の

日本の姿を話されていました。現在の世界を見渡すと、様々な困難がうずまいているが、どんなに迂余曲折を経ようとも、日本は必ず社会主義になるだろうし、全世界がマルクスの「自由の王国」に到達するであろうことを、40年を越えんとする学問研究の当然の帰結として確信されていたばかりでなく、それをなしとげる主体が着実に育っていることにも確信をもっておられた先生が、その実現をみることもなく、途中でなくなられたことは、誠に残念でなりません。

しかし、私たちも、先生から教えていただいた研究者の自主性、主体性、そして研究の厳しさと研究成果にたいする誇り、そしてなによりも勇気を糧として、先生が歩んでこられた道をしっかりと受けつぎ、新しい社会を作りあげるべき主体の力量が大きく前進してきていることに確信をもちつつ、70年代の激動期を理論と実践との両面において邁進していくことをここでお誓いしたいと思います。

松井先生、安らかにお眠り下さい。

1972年 9月30日